

事例3

岩手県盛岡市

若者×地域＝GINGAの継続のために

特定非営利活動法人 いわてGINGA-NET

代表 八重樫綾子さん



役員研修では、組織の未来を描くことができた(提供：いわてGINGA-NET)

いわてGINGA-NETプロジェクトを中心とした事業展開の模索を続けるなかで、NPO法人の運営の基礎固めにも尽力してきた。NPOを磨く15の力でNPO運営の基礎を学び、会員の10倍増につなげる。運営強化の試みはつづく。



八重樫綾子(やえがし・あやこ)
岩手県盛岡市出身。岩手県立大学社会福祉学部卒。2011年夏、震災後のいわてGINGA-NETプロジェクトの主メンバーを務めた。2012年2月、特定非営利活動法人いわてGINGA-NETを設立、学生ボランティアネットワーク構築や人材養成に取り組む。現在、特定非営利活動法人いわてGINGA-NET代表、岩手県立大学教育復興支援員。

2012年4月、八重樫さんは…

2007年の中越沖地震の際、岩手県立大学から多くの学生が現地災害ボランティアセンターの運営支援を行った。ボランティアから戻った学生は本格的に学生ボランティアセンターの準備に動き出し、センターが2008年に設立される。同年に岩手県立大の社会福祉学部に入学生した八重樫さんは、1回生のときから学生ボランティアセンターで活動するようになり、その冬にはある企画の代表を務めるまでになる。

震災当時、八重樫さんは県立大学の3回生、学生ボランティアセンター代表。2011年に開始したいわてGINGA-NETプロジェクト(以下、GINGA)には本部スタッフとして参加。被災後の大変な状況のなか、岩手にたくさんの学生が関心をもち、実際に1週間という時間を使ってボランティアに来てくれたことが嬉しかった。夏、冬と学生を受け入れ、その後も学生ボランティアが通い続ける必要性を感じた。支援活動を続けるためにも、活動の母体となる受け皿が必要となり、2012年2月、NPO法人化へ。その際、「言い出しっぺ」としてリーダーシップを発揮し、仲間に理事就任等呼びかけ自らは代表に。3月大学卒業。4月から専従。あれよあれよという間にNPOの代表かつ専従スタッフにのぼりつめた。けれど、5月に始まった育成・強化プロジェクト参加のときは**15の力**について「全部知らなかった」というNPO運営の初心者だった。

八重樫さんの取り組み

■ 震災の夏、1000人を越える学生ボランティアを動員

GINGAに関しては、すでに活動の様子をしっかりとまとめた2種類の報告書が存在する。ひとつが2012年3月にまとめられた「いわてGINGA-NETプロジェクト活動報告書」。震災後の夏、初めてプロジェクトを開催した2011年7月末から9月末にかけての活動の様子を詳細に記載している。

プロジェクトの仕掛け人のひとりが、岩手県立大学准教授(当時)の山本克彦さん。開始時のプロジェクト実行委員長である。山本さんは、この報告書のなかで、いわてGINGA-NETの命名について、岩手県発であることを知ってもらおうと「いわて」と「GINGA」という言葉を使ったと書いている。銀河は宮沢賢治の作品「銀河鉄道の夜」からも岩手県をイメージできることと、たくさんの星たちの集まりのように多くの学生がこの地に集結してくれることを願ったものだという。

そして、その名の通り、じつに全国各地146校から1086人の学生ボランティアが2011年夏、岩手県住田町に集まり、そこを拠点に、大槌、釜石、大船渡、陸前高田を中心とした沿岸地域に派遣され、ボランティア活動を繰り広げた。

2012年のNPO法人化以降もGINGAは学生の休暇に合わせて夏冬春のサイクルで続けられており、それぞれ夏銀河、冬銀河、春銀河と呼ばれている。直近である



学生たちが仮設住宅の集会所で住民と交流(提供:いわてGINGA-NET)

2013年度を見ると、夏銀河2013には47大学から307名、冬銀河2014年には6大学9名、春銀河2014には23大学57名が参加している。学生の平均的滞在は1週間。住田町の体育館に雑魚寝状態なので体力的にも1週間が限界と考えていたが、被災地の状況が変容するのを受け、2014年から現地をよりよく学ぶため基本を2週間の長さに改訂している。八重樫さんは、事務所のある盛岡から沿岸へひんぱんに通っており、盛岡が6、沿岸が4の割合で過ごしている。

法人化以降、事業も多角化し、現在はコミュニティ支援事業として週末ボランティアワークキャンプ、人材育成事業としてコミュニティ支援力養成研修会（2013年度は神戸市と高知市で実施）、学生ネットワーク支援事業としていわて学生コミュニティカフェの運営等を行っている。

■ 学生ボランティアの役割で模索

代表になった八重樫さんがもっとも苦心してきているのは、地域の困りごとと学生のスキルをいかに効果的にマッチングさせるかという点。一方で学生の気持ちを現地で最大限生かし、他方で被災地のニーズに応え、しっかり役に立っていく。それは簡単なことではない。そのために、地域に足繁く出向いて話を聞いたり、地元の社会福祉協議会（社協）と相談したりすることは欠かせない。特に、緊急支援期を過ぎたあと、必要になっているのは力仕事を数で動員することよりも小さな知恵を集めること。人数は少なくとも責任をもって根気強く寄り添う姿勢を見せること。当初は、「知りたい」、「できることをやりたい」、「被災地で困っている人を助けてあげたい」モードが目立つ学生のあいだにも、次第に「一緒に学ぼう、考えよう」の態度が見えるようになってきている。

GINGAに関する報告書のもうひとつが『東日本大震災における学生ボランティア活動の実践事例研究～いわてGINGA-NETの福祉的支援活動を通して～』と題された、厚生労働省の社会福祉推進事業の補助金を活用して作成された調査報告書。これは、2012年7月から2013年3月にかけての調査をまとめたもので、2013年3月末に発行されている。

この調査報告書のなかで、八重樫さんは「ちょっと頼りない学生が、誰に話を聞いたら良いかを、住民と一緒に



いわてGINGA-NETプロジェクトに関する報告書（提供：いわてGINGA-NET）

に考えるなど、組み立てを一緒にしていけることは、その地域が力をつけていく（く）ことでもある」と述べている。学生が「助けましょう」の姿勢から「教えてください、一緒に考えさせてください」の姿勢に転換することが、新たな支援の可能性を作ることにつながるという理解である。

さらにこの調査報告書では、学生による「福祉的支援活動」の可能性が考えられる分野として、健康、食、娯楽、季節行事、サロン活動の5分野をあげている。季節行事に関しては、例えば、正月の場合、「正月らしい食べ物、家族の団らん、もちつき行事など、すべての雰囲気を専門職や地元住民だけで作り出すことは不可能である。冬銀河2012においては、学生の想いや行動が正月の『雰囲気』を丁寧に作りあげていた」と分析している。

復興のステージが進み、ニーズも変容するなかで、当初のGINGAの構成を踏襲しつつ、学生は現地で何をすべきか、効果的な事業運営はどうあるべきか。その答えを出すためにも、岩手県内の学生ネットワークを維持・発展させる事業や、学生のコミュニティ支援力を上げる事業も走らせ、GINGAの模索は続いている。

■ 育成・強化プロジェクト参加と役員研修

このようなGINGAを中心とした事業展開の模索が主軸だとすれば、GINGAにとっての運営の基礎固めはその補完軸として、ここ2年間、動いている。15の力でNPO運営の基礎を学んだ八重樫さん。この研修で一番役に立ったのは、「見通す力」での財源分析。特に会費・寄付を増やしていくことの重要性だったと言う。会員や



役員研修でビジョンや組織体制などについて話合った(提供:いわてGINGA-NET)

寄付者とのつながりを大事にするため、寄付をしてくれた人には欠かさず感謝状を書いた。会費収入を増やすために、GINGAの参加者には必ず会員になってもらうことにして、学生スタッフも会員にした。その努力の甲斐で、2013年度の会員数は497人。前年度が48人だったから、10倍以上である。

2013年5月、3日間にわたって、育成・強化プロジェクトの基盤整備コースの枠組みを活用して、役員研修「信頼されるNPOを目指すための法人基盤整備強化研修事業」を実施した。代表、副代表、理事の6名を参加者として、現状把握、ビジョン設定、事業見直し、組織体制づくりについて検討した。最大の収穫は、役員同士が自分自身の思いや組織の未来を描く作業を共有したこと。それまで、各人が忙しいなかで、こういった話題を役員のあいだで共有する機会がなく、組織強化のための中核メンバーのコミュニケーションの重要性を痛感させる契機となった。

成果と変化

■ 役員研修の成果とその後の課題

役員研修の具体的成果は、NPO法人いわてGINGA-NET「未来に向けてのメッセージ(経営理念)」としてまとめられた。法人のミッションは、「共に支え合う社会を築くため、身近な地域に目を向け、主体的に活動できる

若者を育成します」。バリュー(基本価値)は「若者×地域 未来を拓く架け橋に」。

ビジョン(経営理念中長期計画:2013年-2021年)には、2016年のいわてGINGA-NETと2021年のいわてGINGA-NETがあって、前者は、(1)経験からの学びや気づきを可視化し、広く発信する。(2)復興状況に即したプロジェクト内容への展開。(3)人と人につながる場を生み出す。後者は、(1)いわてGINGA-NETの応援団を増やす。(会員300人の獲得を目指す)(2)活動フィールドの展開と拡大。(3)学生ボランティアのコーディネート機能を担う人材ネットワークを岩手県内全域で構築する、とある。

役員のあいだで組織の未来を描く作業を共有し、それを言語化できたことはよかった。その後、メーリングリスト等で活発な議論がなされるようになった、と八重樫さん。しかし残念ながら、その後、この種の議論は役員のあいだで定着していないという。NPO運営のなかでも、役員によるガバナンス機能を十分に発揮させることは、硬軟いろいろな仕掛けが必要な分野でもあり、八重樫さんは「働きかけ不足」と反省している。同時に、今後のGINGAの展開を考えると、地域の課題に密接に関わっている役員が必要で、役員の構成を見直す時機に来ているともいえる。

■ 個人の成長を組織強化につなげる

長く八重樫さんを指導してきている山本さんは、八重樫さんのNPO法人化に向ける意気込みは強かったが、法人運営に関しては初心者であったため、日本NPOセンターの研修は役に立ったと思うと言う。集合研修といった全体メニューに加え、ほかの参加者との交流、学びの共有が大いに刺激になったようだと言っている。いわてGINGA-NETの理事でGINGAの初期のスタッフでもあり、自身も育成・強化プロジェクトに「子どものエンパワメントいわて」のスタッフとして参加した浅石裕司さんは、八重樫さんが若者育成に関して強い気持ちをもって団体の強みに転換できないかと考えている。同じ理事で今は社協の立場からも団体を支援する田口美樹さん(岩手県社会福祉協議会)は、GINGAという震災直後に大きな足跡を残したプロジェクトの財産をうまく継承して、地域と学生との重層的なつながりを維持

発展していきたいと話す。浅石さんも田口さんも八重樫さんが大学に入学して学生ボランティアセンターに関わり出した頃から八重樫さんを知っている先輩にあたり、八重樫さんが団体の代表になって大きく成長したことを認めている。また、運営面の弱さなど、理事として団体の改善点も把握しており、今後、理事会の活性化も含めて、協力態勢を組んでいけるのではないかと期待できる。

これから

さきに紹介したGINGAに関する2013年3月末に発行された調査報告書に、学生ボランティア活動の課題が指摘されている。さまざまな住人の思いや語りから本来のニーズを抽出すること、地域住民の本来のニーズを、適切な方法により「解決の糸口」へとつなげていくことなど。役員研修でまとめたバリューで「若者×地域 未来を拓く架け橋に」と端的に示されているが、外からの学生と地域の人をいかにつないでどんな課題解決へと導

いて行くか。災害時から平時へのシフトが起こりつつあり、東北の農村、漁村の常日頃の地域課題が見えているなかで、課題解決への道筋を作ることは団体の今後の活動の大きなテーマになる。

一方、阪神淡路(1995年)→中越(2004年)→中越沖(2007年)と災害を経験するなかで、各地の大学で学生ボランティアセンターを拠点にした防災・減災の試みが進んだ。東日本大震災でのGINGAでの経験を経て、今後大学が学生ボランティア活動をより系統的にカリキュラムに組み込むなど、動くべき方途も見えている。学習効果によって学生の支援価値があがれば、被災地での活動の成果も大きくなる。

山本さんは、かつて阪神淡路大震災を経験したボランティアリーダーたちが、NPOセクターのリーダーへ成長していったように、八重樫さんをはじめ、GINGAを経験した学生たちがNPOの次世代を担うようになってほしいと考えている。



団体の取り組みを通じて、個人が実現させたいことを書きだした(提供:いわてGINGA-NET)

中村 美穂さん（子どものエンパワメントいわて コーディネーター）

学生スタッフとしてGINGAに関わり、被災地岩手と出会った。GINGAには、多様な層、多様な興味をもつ学生がいる。その経験がもとで、2013年から子どものエンパワメントいわてのスタッフとして県内の子どもの寄り添い支援をやっている。GINGAは今後の災害支援のモデルになり得る。継続的に運営している八重樫さんやGINGAのスタッフにはとても感謝している。いまもよき仲間。



澤口 和彦さん（沢口製パン：釜石市鶉住居町）

釜石でパン屋をやっていたが被災して仮設住宅にいたときに、GINGAがやってきた。一番印象に残っているのは、2013年の正月。年越しで7人の学生と濃い時間を過ごすことができたこと。春銀河2013でも、今の場所にパン屋を開設する手伝いに6~7人来てくれた。自分が学生の頃を思い返すと、わざわざ遠いところから来て「よくこんなことするな」というのが率直な感想。「なんか返さないと」思う。学生を受け入れるのもそのひとつ。

久保 宣利さん（漁師：釜石両石港）

最初の年に仮設にいたときに、GINGAの学生と知り合った。2013年からワカメ収穫やコンブの天日干しを手伝ってもらうようになった。人手は欲しいが、漁師の朝は早く、頼めることも限られているので、漁業体験とかと合わせてスケジュールを組んでいる。今から3年~5年経っても、学生は来てくれるかなあ、忘れられてしまうんじゃないかなあと思う。その意味でGINGAとのつきあいは大事で、しっかり継続してほしい。

八重樫さんにとっての「市民活動」とは何ですか？

あえて言うならば、多くのひとに「きっかけ」となる場や機会を提供することに意義があると感じています。



〔団体プロフィール〕

特定非営利活動法人 いわてGINGA-NET

〒020-0063 岩手県盛岡市材木町4-29

TEL. 080-6076-3580

URL. <http://www.iwatetinga.net>

代表 八重樫綾子

設立 2012年(法人格取得 2012年)

●団体概要

東日本大震災をきっかけに全国から学生ボランティアを動員し岩手県の沿岸部に送り込んだいわてGINGA-NETは、翌年2012年にNPO法人化。若者が自らの生活する地域に対して問題意識を抱き、その解決に目を向けることをきっかけとして、主体的な地域貢献の活動を行う。また、それらの発信を行うことで、県内外の若者の地域に貢献できる力を育成し、若者発信の活動の発展と活発化に寄与する。GINGA-NETプロジェクトを継続するとともに、コミュニティ支援事業、人材育成事業、学生ネットワーク支援事業等を行っている。

●2013年度

運営体制：役員8名、スタッフ(常勤有給：1名、その他：0名)

収入総額：14,671,980円